

IEC/SC22D/WG1 会合の思い出

池田 吉堯（横浜国立大学・名誉教授）

SC22D/WG1（サイリスタを用いた電鉄用単相電力変換装置規格準備会）が構成されたのは1969年のことである。幹事国は英国で、第1回会合はロンドンで3日間開催された。ドイツ、フランス、スイス、スウェーデンの委員と共に、日本からは当時日本国有鉄道におられた川添雄司氏と私が参加した。同会合の幹事案に対して、文書による詳細な意見提出を行ったのは日本だけであった。日本では早くから仙山線で単極水銀整流器を用いた交流電化の基礎実験が行われていたが、その後もサイリスタがSCR (Silicon Controlled Rectifier)と呼ばれていたときから、鉄道電化協会（現：日本鉄道電気技術協会）において関連した研究委員会（委員長：山田直平東京大学教授）が持たれており、本案件に関する技術的蓄積が大きかったと言える。

WGの討論は朝9時から夜8時過ぎまで、昼食時を除いて精力的に行われたと記憶している。多くの箇所で日本意見が審議されたが、そのたびにわれわれのたどたどしい英語に参加委員が熱心に耳を傾けてくれたことが印象に残っている。

同会合に基づく修正案に対して、国内委員会の意見はなお多かった。翌年、第2回WG1がベルリンで開催されたが、そのときも文書による意見提出を行ったのは日本だけである。第2回会合には日本からは私1人だけが参加した。正味1日半の会合であったが、きわめて精力的に審議が進められ、最初の本委員会提出文書案が作成されるに至った。同案件は、1975年にPub.411-1として結実することになる。

第2回会合でも前回と同様に委員達は同一ホテルに合宿したが、さらに今回は昼食ばかりでなく夕食までも全員一緒に、終日息を抜くことができなかった。絶え間ない緊張感によって、私の胃は食事を受け付けなくなってしまい、回復に時間を要したことが、いまは懐かしく想起される。そういえば、会合の翌日にはドイツ委員の故Skudelny氏（当時BBC所属、後にアーヘン工科大学教授）のご好意により、特殊観光バスで「ベルリンの壁の向こう側」を興味深く垣間見たりしたのだが、その壁も崩壊して久しいことを思えば、時の流れに感慨を覚えざるを得ない。

その後、1978年に技術的な補足文書としてPub.411-2が制定された。その序文には、同文書が日本の国内委員会が提出した技術資料に基づくものであることが明記されている。その後の技術進歩をうけて、同文書は1990年代に入ってから改訂されることになったが、その作業途中で、私は長らく委員長を務めてきたTC22関連の国内委員会から引退した。しかし引退直前の改訂版の草稿にも、その内容が日本の国内委員会の提出文書に基づくものであると記されている。

このように、電力変換装置の国際標準制定においては多くの分野で日本がその技術的イニシアチブをとっていたわけであるが、このことは国際標準化100周年を記念にするにあたりぜひ書き留められるべき事実と思われる。そしてその過程に私も微力ながら関与できたことに、ささやかな喜びを感じずる次第である。